

クローズアップ・コレクション

橋本平八《善財童子》

制作年不詳(1934年以前)
楠、着色 高33.5cm
坂井義行氏寄贈

高曾由子



橋本平八(1897-1935)は、現在の伊勢市朝熊出身の彫刻家。郷里で彫刻の手ほどきを受けた後、上京し、日本美術院展を舞台に活躍しました。1926(大正15)年には帰郷して朝熊を拠点に制作を行い、古今東西の芸術に学びつつ、独自の制作を深めたことで知られます。芸術家の多くが都市部を舞台に活躍した時代に、郷里で木彫家として生活していくことには困難もあったかと思われそうですが、その支えとなったのは郷里の支援者たちでした。彼らはたびたび作品を購入し、橋本と親交を結んでいます。

本作も郷里に伝わった作品の一つ。華厳経に説かれる求道の童子である善財童子をあらわしています。伊勢の倭町の関係者が所有していましたが、1934(昭和9)年に宇治山田市明倫小学校長の坂井作蔵氏のもとに渡りました。橋本に憧れていた坂井氏は橋本に作品解説を依頼しており¹、本作には橋本がこれに応えた書簡が付属します。書簡で橋本は、製作に際しては「彫刻上の像即造像の主観と考証上の主観は二つ乍ら調和す可き」²と考へ、善財童子が歩みながら求道したという仏典に依りつつ、造形にも気を配ったことを懇切に説明しています。制作時期は不明ですが、橋本は1930年の正月、1931年にも善財童子像を制作していた記録があり、本作も近い時期の作でしょうか。

なお、生前の橋本と懇意にしていた岸村忠次氏は、橋本の代表作の一つ《花園に遊ぶ天女》(1930年、東京藝術大学蔵)の造形について、その直前に伊勢の支援者のために制作していた善財童子像を発展させたものと解釈していました。³ 手や首のポーズは異なり、これを裏付ける資料も残されないのですが、膝を曲げて上半身をねじる特異な姿勢は確かに両者に共通しており、興味深い解釈です。橋本が本作のような小品や受注作品の制作を通して造形や主題の研究を重ねていたとすれば、伊勢の環境が制作に与えた影響も大きかったといえるでしょう。

註1 | 坂井作蔵発橋本平八宛書簡、1935年4月27日消印、当館寄託
註2 | 橋本平八発坂井作蔵宛書簡、1935年4月28日消印、当館蔵
註3 | 岸村忠次作成「橋本平八先生御制作年表調」、当館寄託

所蔵品貸出前の保存管理について

橋本三奈



村山穂多(自画像)の作品点検風景

三重県立美術館では年間約50点の所蔵品を国内外の美術館・博物館へ貸出しています。当館では様々な素材と形態の作品を所蔵しており、総合的な作品保全を考慮して貸出の可否を館内で慎重に判断します。

他館に貸出す作品は、館内で展示するのとは異なり、輸送による振動など作品への負担をとまなうことから、特に状態に配慮して貸出準備を行います。まずは、作品をペンライトで照らしながら損傷や汚れがないか点検します。油彩画作品で絵具層に亀裂や浮き上がりが見られる場合は、接着・固定などの保存修復処置を施します。また作品保全のために低反射アクリルなどの面保護ガラスを設置することもあり、貸出へのリスク管理に配慮しています。

貸出には様々なリスクが考えられますが、他館の企画展で展示されることにより、遠方の方に見ていただく機会になること、そして新たな研究の端緒となることも期待されます。現在も貸出中の作品がありますので、ぜひ他館での企画展で当館の所蔵品をお楽しみください。

表紙解説

『「シュルレアリスム宣言」100年 シュルレアリスムと日本』展より 速水 豊

ほぼ生涯のすべてを京都に過ごした北脇昇(1901-1951)は、伝統が残る古都で、西洋の最前衛であったシュルレアリスムを追求した。仲間とともに制作、発表活動をしつつ、幅広い分野におよぶ文献を渉猟し、芸術に関する思索を書き記した。彼の考察は東西思想を照応させるユニークなもので、やがて世界的にも類例のない革新的な絵画表現の実践につながる。

遺作を保管する東京国立近代美術館が1997年に回顧展を開催、北脇は再認識され、その研究は大きく進展した。近年では欧米の複数の研究者が北脇についての研究を博士論文にまとめている。

《独活》はシュルレアリスムの影響を受けた最初期の作例。植物のウドに人の姿を重ねる発想は、サルバドール・ダリのいわゆるダブル・イメージの手法に近いが、ダリのように対象を変形しておらず、これはむしろ「見立て」と呼ぶのがふさわしい。それが日本的な手法かどうかはともかく、北脇の作品が早期から独自性を有していたことを示している。



北脇昇《独活(うど)》
1937年 東京国立近代美術館蔵

利用のご案内

開館時間 |
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日 |
月曜日(祝休日にあたる場合は開館、翌火曜日
[2024年5月7日、7月16日、8月13日、9月17日、
9月24日]閉館) ※4月30日(火)は開館します。

観覧料 |
○常設展示
[美術館のコレクション+柳原義達のアート/特集展示]
一般 310(240)円
学生[大学・各種専門学校等] 210(160)円
高校生以下無料 ※()内は20名以上の団体料金
○企画展示/その都度定めます。

※学校の教育活動として県内の小・中・高・特別支援学校等の団体が観覧する場合、引率者も含めて無料となります。
※障害者手帳等(アプリ含む)をお持ちの方が観覧する場合、付き添いの方1名を含めて無料となります。
※家庭の日(毎月第3日曜日)の観覧料は、各展覧会(企画展/常設展)の団体割引料金となります。
※県民の日[2024年4月20日(土)]は常設展の観覧が無料となります。

メールマガジン |
三重県立美術館の情報を、みなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。購読料無料。
詳しくは、美術館ウェブサイトをご覧ください。

美術館公式X(旧Twitter) |
三重県立美術館の最新情報をリアルタイムで配信しています。Follow us on X @mie_kenbi

三重県立美術館友の会へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇親会等、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

年会費 |
一般会員:3,000円 ペア会員:5,000円
グループ会員(4名):8,000円

○特典
会員鑑賞券配付、観覧料半額割引、ミュージアムショップご利用割引等。
詳細は三重県立美術館友の会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

公益財団法人 三重県立美術館 協力会賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布等、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

会費 | 年間一口
法人:50,000円 個人:25,000円
準会員:10,000円

○特典
展覧会ならびに内覧会への招待、各展覧会のカタログ謹呈等。詳細は三重県立美術館協力会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

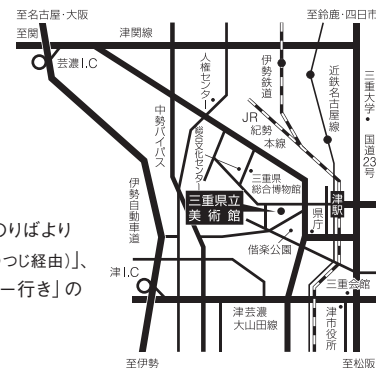
三重県立美術館

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM

〒514-0007 三重県津市大谷町11
TEL.059-227-2100(代表)
FAX.059-223-0570
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/



交通 |
津駅(近鉄・JR)西口より徒歩約10分または、津駅西口1番のりばより三重交通バス「西団地循環」、「津西ハイタウン行き(むつみ・つつじ経由)」、「夢が丘団地行き(総合文化センター前経由)」、「総合文化センター行き」のいずれかに乗車約2分、「美術館前」下車徒歩約1分
※できる限り公共交通機関をご利用ください



三重県立美術館ニュース

HILL WIND 54

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM NEWS



三重県立美術館ニュース
「HILL WIND 54」

発行日 | 2024年5月21日(※・無断転載)
企画・編集・発行 | 三重県立美術館 デザイン | 濱田尚子 印刷 | サンマッセ株式会社

『シュルレアリスム宣言』100年

シュルレアリスムと日本」展開催にあたって

速水 豊

「シュルレアリスムと日本」展は、1930年代を中心に戦前の日本で盛り上がりを見せたシュルレアリスムの絵画表現を包括的に紹介する久々の展覧会である。1990年に名古屋市美術館で開かれた画期的な「日本のシュルレアリスム1925-1945」展以来30数年ぶりの開催となる。名古屋の展覧会もきっかけとなって、その後、この分野の研究が進み、今回は、この間に新たに判明した作品・資料や知見を展示や図録に反映させた。

とはいえ、本当に戦争は多くのものを破滅させるものだと感じる。本展が対象とすべき少なからぬ美術家が若くして亡くなり作品も残らず、美術史から消えているなかで、今回は可能な限り多数の画家の紹介に努めた。名を聞いたこともない画家の絵がたくさんあると感じられるだろうが、戦前期の若い熱気にあふれた美術運動を想像するよすがとして、当時の最先端の表現に挑んだ青年画家たちの絵にも注目いただければ幸いである。

一方、展覧会を組織する企画者のひとりとしては、このテーマにおいて欠くことのできない代表作、重要作を含めることにも意を注いだ。というも、美術史上重要な作品は、諸々の理由で借用が難しい場合が多く、しかし企画者としては、他の作品で代替させ難いからだ。今回は、作品所蔵者のご理解、ご好意のおかげで、幸運にも数々の代表作をばほらさず展示することができた。

ここでは、なかでもよく知られる重要作3点に絞り簡単に紹介しよう。

こが はるえ 古賀春江 (1895-1933) 《鳥籠》

日本で初めてシュルレアリスム絵画の出現が話題となったのは、1929年の二科展においてであり、その中心的な画家が古賀春江であった。《鳥籠》はこの時発表された作品。やはり同展に出品された《海》(東京国立近代美術館蔵)のほう知名度は高いが、シュルレアリスムの受容という点ではこの絵が重要である。

鳥籠のなかに裸婦がいるという発想、右半分の器械のような形態と水鳥がいる情景の対比など、ここには精神分析的な解釈を誘うような、日常的にありえない、ものともとの組み合わせによる効果、シュルリアリストがデイズマンと呼んだ効果がある。



古賀春江《鳥籠》1929年 石橋財団アーティゾン美術館蔵

三岸好太郎 (1903-1934) 《海と射光》

三岸もシュルレアリスムの影響を最初に受

けた画家のひとり。彼が最もシュルレアリスムに接近したのは没年の1934年出品作であるが、《海と射光》はそのうち最大の作品で、全画業をとおしての代表作ともされる。

海辺に散らばる貝殻のなかに横たわる裸婦。布で覆われた顔がショッキングである。貝殻のかたちとともに倒錯的なエロティシズムを思わせるモチーフだが、青い空と海を背景にした簡素な描写は、むしろ明るく乾いた抒情とも言うべき雰囲気醸している。



三岸好太郎《海と射光》1934年 福岡市美術館蔵

あいみつ 鏡光 (1907-1946) 《眼のある風景》

日本の近代美術の本によく掲載されている有名な絵。鏡光の代表作と言って間違いはないが、これほど謎めいた作品も他にない。画面を占める岩か土塊のような固まりのなかに眼だけがくっきりと描かれる。研究者が様々な説を唱えているが、作品の明確な意図は明らかでなく、その謎めいた魅力はますます高まるように感じられる。

類例のない特異さばかりが際立つとはいえ、日中戦争開戦まもなく描かれた本作が大戦へ向かう時代の動乱や不安を暗示していると誰しもが感じるであろうし、これがシュルレアリスムの影響なしには描かれなかったことも間違いあるまい。



鏡光《眼のある風景》1938年 東京国立近代美術館蔵

時代を写す「目」

—洋画家たちと佐藤三八写真舗

原 舞子

企画展「洋画の青春—明治期・三重の若き画家たち」は、明治20年代から30年代にかけて三重県で図画教員を務めた藤島武二、鹿子木孟郎、赤松麟作の3人の画家を軸に、画家たちの三重での活動と、前後する時期の日本の油彩画＝「洋画」の様相を紹介するものとして企画しました(2024年1月27日-4月14日)。

藤島武二、鹿子木孟郎、赤松麟作は三重県の生まれではなく、のちの活動拠点も東京、京都、大阪とそれぞれ異なります。また、彼らが三重で過ごしたのはわずか2-3年の間であり、画家としてもまだ駆け出しの20代の頃のことです。三重時代に制作したことが明らかな作品もほとんど残っておらず、三重で過ごした足跡を追うことは難しいところもありました。120年以上前の時代ですので、当時を知る人から直接話を聞くことはできません。彼らの動向を知る大きな手がかりとなったのは、知人に書き送られた書簡や当時撮影された写真でした。

展覧会準備中には、藤島武二が三重で出会った人々に宛てた書簡が新たに発見され、展覧会や図録で紹介することが叶いました。これらの書簡は、藤島が三重を離れたのちも三重の人々と長く交流していたことを教えてくれます。そこには、若き日々を支えてくれた人々に対する深い感謝の言葉が綴られており、洋画界の偉丈夫・藤島の知られざる一面が垣間見えるようです。

書簡とともに見つかった1枚の写真があります(図1)。この写真は、藤島と1歳違いの僧、加藤信海へ贈られたものです。写真が貼られた台紙の裏面には、1893(明治26)年12月(臘月)31日と墨書されています。藤島はこの年の7月に三重県尋常中学校に図画教師として赴任してきたばかりでした。写真の藤島は、スリーピーススーツ姿で頭の部分が大きく膨らんだデザインのベレー帽のような帽子を被っています。左手にはパレット、絵筆、腕鎮を組み合わせて持ち、いかにも洋画家らしい姿態です。写真館にパレットや絵筆は置いていないでしょうから、わざわざ藤島が写真館に持ち込んだのでしょうか。

同じスーツを纏っているらしい別の写真も残されています(図2)。こちらはプロフィール(横顔)です。台紙によれば、どちらの写真も津市地頭領町(現・津市東丸之内)の佐藤写真舗で撮影されています。藤島は少なくともあともう一度、佐藤写真館に足を運んでいるようです。和服姿の写真(図3)は、中学校の同僚でしょうか、同じく和服姿の二人の男性とともに写っていますが、藤島は足を組み、中折れ帽子を膝の上の載せるというやや気取ったポーズをとっています。

佐藤写真舗を営む写真師の佐藤三八(1853-没年不詳)は、伊勢亀山藩の出身と伝わる人物です。1873(明治6)年、名古屋の蘭学者であり写真師の東蘭一(別名・藤蘭一、1841-1910)の



図1 | 藤島武二肖像写真 1893(明治26)年 専照寺蔵



図2 | 藤島武二肖像写真(プロフィール) 1893(明治26)年 個人蔵



図3 | 藤島武二と二人の男性 1893(明治26)-96(明治29)年頃 個人蔵

もとで写真を学びました。1875(明治8)年に亀山で写真館を開業するも集客に苦戦し、津市地頭領町に店を移します。1893(明治26)年発行の『三重県下商工人名録』には「写真ならびに并写真版石版印刷所」と記載されています。

藤島の後任として三重県尋常中学校に赴任した鹿子木孟郎も佐藤写真舗を訪れています。津で結婚した妻の春(春子)とともに写されたこの写真(図4)の台紙裏面には、「明治三十年拾一月十三日写」と書かれています。孟郎23歳、春18歳の初々しい新婚時代の写真です。

明治期の写真館での撮影とは、その人の人生を刻む出来事であったことでしょう。写真師の佐藤三八についても興味は尽きず、今後調査していきたいと考えています。



図4 | 鹿子木孟郎と春子夫人 1897(明治30)年 個人蔵 [鹿子木孟郎調査委員会編「鹿子木孟郎史料集」(学芸書院、2016年)口絵より転載]